

---

# Genesis

黒色猫@芍薬牡丹

---

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

Genesis

### 【Nコード】

N6687M

### 【作者名】

黒色猫@芍薬牡丹

### 【あらすじ】

短編集です。基本的に一話完結です。普通に短編として投稿しないのは、“短編集”という一つの読み物を意識したものだからです。一応は連載小説というカテゴリーにしておきます。投稿なんて不定期万歳。思い付いた時にバーツと書きますので、いつ投稿するかは全く不明です。それでも良ければ、どうぞ、ご覧下さいませ。

## 01 - 逃げ水の向こう側

逃げ水、というのをご存知だろうか。

よく晴れた風のない日に、遠くに見えるアスファルトなどの上が水のように見える現象だ。近付けどそれに辿り着くことは出来ないことから、逃げ水、という名称が付いた。夏の風物詩だ。

これは熱せられた地表面近くの空気が膨張し、屈折率が変わることにより起きる、一種の蜃気楼である。屈折率が変わり、上方の景色が映り込むため、水面のように見えるのだ。

そんな逃げ水。決して辿り着かないはずの逃げ水に辿り着いた時、  
一体どうなるのだろうか。

「……………」

それが、今現在の僕の状況だった。

その日は8月に入ったばかりの暑い日だった。僕はうだるような暑さが続く中、クーラーの効いた部屋でグッタリしていたのだが、同居人が、アイス欲しいなあ、などと言いだした。最初はもちろん拒否した。当たり前だ。外は37 以上ある真夏日の気温。誰も外になんか行きたくないだろう。

だが、次の瞬間見せた残念そうな顔に、仕方無くコンクリートジヤングルを抜け、近くのコンビニに向かうことにした。

我ながら甘いなあと思う。

というわけで。

「あつい……………」

なんて呟きながら、午後が一番暑い時間帯に僕は徒歩でコンビニに向かうのだった。

最初は、歩きながら陽炎揺らぐ空気をぼんやりする頭で眺めていたが、そのうち道の先に逃げ水があるのに気付いた。夏だなあ、なんてばやきながら進行方向にある逃げ水を見つつ進んでいたのだが、なぜか逃げ水が近付いている気がした。

あれ？と思った時には、時すでに遅し。いつの間にか僕は水面のような地面に立っていて、周囲からは静寂しか存在しなかった。

「一体なにが起こったんだ……………」

まず、足元を確認する。水面のように反射しているが、しっかりと踏みごたえがあり、それが堅い地面だということを伝えてくる。なんだか、鏡の上に立っているような感覚だった。

次に周囲。つい10秒ほど前までは汗を拭きながら歩く営業マンや、荷物の積み卸しをしている宅配の人や、日傘を差して歩く婦人なんか居たはずだ。

しかし今、いつの間にか、周囲に人は誰も居なかった。先ほどまでうるさいほど鳴いていた蝉時雨も止み、鳥の囀りすら聞こえない。道路を走る車は一台もおらず、信号が淋しそうに点滅し、赤になった。

10秒ほど迷ってから出した決断は、

「……………戻ってみるかな」

そして僕はきびすを返し、再び歩き出した。

しかし、1分歩いて5分歩いて、元の“世界”には帰れない。それだけでなく、半径100メートルくらいから先に移動出来ないことが分かった。どれだけ歩いて、元の場所に帰ってくるのだ。

これは困った。

…………困ったところの話ではないよね…………。

「どうしよう…………、どこかの店に入ってみようかな…………」

そう呟くと同時、僕の独り言に、初めて介入する声が聞こえた。

「あら？ 珍しいやん、人が入り込んで来るなんて」

その声に、僕は驚いて振り返った。

次の瞬間、僕は固まってしまった。

そこには、時代錯誤な昔風の着物を着て、肩上で軽くウェーブした黒髪を持つ見目麗しい女性が立っていたのだ。

よく見れば前髪が目にかからないように、左側はピンで留めているみたいだ。その現代風なところと、古風な着物がなんともミスマッチで、しかし彼女の不思議で神秘的な雰囲気には妙にあっていた。

「……………そんなに凝視されると、うちも恥ずかしいんやけど……………」

「あつ、ごめんなさい」

彼女の方が年上に見えたので、一応敬語を使う。

しかし彼女は、少し苦笑して首を横に振った。

「ごめんやけど、普通に話してくれへん？」

「え？ あ、はい…………じゃなくて、うん」

一瞬間違えたが、すぐに訂正した。すると、彼女はとても嬉しうに笑った。

「うん、ありがとう。じゃあ久し振りに人と会<sup>あ</sup>うたし、よければちよつと話しせえへん？」

彼女は優雅な京都訛りで訊ねる。生まれは京都なのだろうか？  
なんてことを考えながらも僕は、うん、と頷いた。

それから近くの店に入り（もちろん誰もいない）、彼女は勝手に店の奥へ入ると、両手にアイスコーヒーを持って帰って来た。

「コーヒーで良かった？」

「うん、ありがとう」

「いえいえ、どういたしまして」

彼女にニコニコしながら席についたので、僕もその対面に座り込んだ。

ここは店内が適度に薄暗く、落ち着いた雰囲気を持っている。アンティーク風な椅子や小物類と、ステンドグラスで出来た照明器具。部屋の隅には観葉植物が置いてあり、都会の隠れ家みたいな雰囲気だった。

僕は、一瞬でこの雰囲気が好きになった。

「ええお店やろ？」

「うん。こういった空気は好きだね。時間がゆっくり流れる気がするし」

「うんうん、そうやんなあ」

えへへー、と笑う彼女は、とても美しく見えた。

と、まったり雰囲気だった僕に、彼女はズイツと顔を近付けてきた。

不意に感じた花のようないい匂いに身を引きつつ、なんとか言葉を絞り出す。

「な、なにかな？」

「あなたの話、聞かせてくれへん？」

いや、僕としてはこの“世界”に彼女しかない理由や、なぜ帰れないのかや、そもそもこっつて何？という疑問があつたのだが、彼女の期待に満ち満ちた顔に、僕はその疑問に、とりあえずは蓋をする事にした。

「そうだなあ……………、僕が通つてる学校には面白い友人がいてさ、」

そして僕は、自分の学校生活について話し出すのだった。

「……………それじゃあ彼は？」

「うん、結局彼は彼女に告白したよ。結果は言わずもがな。今はみんな仲良くしてるよ。確執もほぼなくなったしね」

周りからしたら、やつとかよ、って感じだったけどね、と僕は続ける。

へえ、と彼女は感嘆の溜め息をついた。

ここであることに気付き、僕は苦笑をもらした。

「なんだか僕の話じゃなくて、友達の話になっちゃったね」

「うっん、話聞いてるだけでも人となりは分かるえ。いやあ、でもそんなドラマみたいなことがあるやねえ……………」

ほあー、と言いながら天井を仰ぐ彼女を見て、今度は普通の笑みがこぼれた。

それを見て、彼女は少し顔を赤くしながら口を尖らせる。

「なんやのよ」

「いや、気にしないで」

飄々と応える僕に、なんだか彼女は不満そうな顔をしていたが、何気なしに見上げた時計の針に、文字通り飛び上がった。

「わわっ！ もう時間なくなってしもた！」

「え、え？ 何事？」

慌てる僕に、彼女は立ち上がり、僕の腕を掴んだ。

「早お行かんと、ここから出られへんようになってまうんや！」  
「ええ！？」

彼女は驚き覚めやらぬ僕を外へ連れ出した。外は、いつの間にか日が傾き始めており、もうじき黄昏時と呼ばれる時間になるだろう。そして、店を出てすぐ右に曲がった彼女は、数歩小走りで進み、すぐに立ち止まった。

そこは、今居た店と、隣のビルに挟まれた、細い路地。人一人通れるかどうかくらいの狭い道だった。

「ここを通れば、元の場所に帰れるはずや」  
「……………君は？」

ここを通れば帰れるのは分かった。  
じゃあ、彼女は行かないのだろうか。

「うちはええんよ」

「……………なんで？」

「ここは本来、人は来たらあかん場所なんよ。うちは偶然入り込んで出られなくなった異邦人。もうここからは出られへんのや」

僕は黙って彼女の言葉を理解する。

僕も薄々は感じていた。彼女の纏う空気は、僕の——いや、僕らのソレとは一線を画している。

それはすでに彼女が——なのを如実に表していて、僕はそれに感覚ではありながら、不思議な確信を持っていた。

「……………分かった。でも、約束をしようよ。いつか、また会おう」  
「それは……………」

分かってる。無茶な話だ。

彼女もここから出ようと、諦めず、何度も挑んだんだろう。

その結果、諦めた。

……………今、僕はとても酷いことを言っている。

諦めてしまうほどに長い間頑張ってきた彼女に、さらに頑張れと鞭打つようなものだ。それは拷問のような——いや、実際拷問ではないだろう。

それでも——

「……………うん、約束しよ！」

彼女は笑って応えてくれた。  
それに僕も笑って応える。

「うん。それじゃ、“またね”」

それはサヨナラじゃなくて、再会を誓う言葉。

「うん、“またね”！」

僕は手を振り、路地へ向け駆け出した。

あの出来事から2年もの時間が過ぎ去った。

あれから路地を駆け抜けた僕は、その先で見知らぬサラリーマンにぶつかってしまった。すいませんと謝りながらも僕は、元の場所に帰って来たんだなと感慨深くなったものだ。

帰ってからもこの不思議な出来事を誰にも話すことはなかったが……、いや、一人だけ友人に話した。

まあとにかく、彼以外誰にも話すことはなかった。

そうして時は過ぎ、あれから僕は、暇になればあの店に足を運んでいる。別に待っているとかではなく、なんかそこに彼女がいるような気がしたからだ。

それに、純粹にその店が気に入った、というのもあるのだけど。

あと、店とビルとの間にあった、僕が元の“世界”に戻るために

駆け抜けた路地だが、こちらにはそんな路地は存在しなかった。というのも、店とビルの隙間は本当に狭く、猫も通れるかというくらいだったのだ。

もしかしたら、あそこがこちらへの唯一の道だったのかもしれない。

そんなことを考えながら、僕はあの日座った席で、アイスコーヒを飲んでいる。もちろん何人か人もいるし、マスターもいる。僕はすでに常連となっているので、マスターとも顔見知りだ。

今はあの時と同じ8月。あれ以来、逃げ水に追い付くことはなかったが、それでいいと思った。だって、約束したのだから。

チリン……

店内に軽やかな音が響き渡る。

店の扉が開いたようだ。誰か入ってきたのか出ていったのか。扉は僕からは背後にあるので、見ることはできない。

すぐにそれは記憶の隅に追いやられ、僕は落ち着いた空気とBGMの中、ぼんやりと本を読みながらアイスコーヒを飲み込んだ。

その時、

ストン、と僕の対面に誰かが座った。相席か？とも思ったが、他に席はまだ空いていたはずだ。

僕はぼんやりとしたまま本から顔を上げ、対面に目の焦点を合わせる。

そして、固まった。

「……………久しぶりやね」

「君は……………」

——そこにいたのはなんと、あの日の彼女だったのだ。  
2年ぶりに会う彼女は、古風な着物ではなく、空色のサマードレスを着て、長い黒髪は2つに緩く括り手前に流していた。

……………僕は驚きで言葉がでなかった。  
しかし、動こうとしない喉に鞭打ち、これだけ絞り出すことに成功した。

「……………約束、守ってくれたんだね」

そう言って笑うと、彼女も花が咲くように微笑んだ。

「あなたと約束したから、うちは戻って来れたんよ。大変やったんよ？ ………………ねえ、久しぶりにあなたのこと話してよ」

その言葉に僕は目頭が熱くなるのを感じつつ、何を話そうかと考え始めるのだった。

——END——

## 01 - 逃げ水の向こう側（後書き）

どうも。黒色猫です。

これは活動報告で書いたアレに、ちよいちよい付け加えて書き直したものです。あまり変わってないかも？

で、その時も書きましたが、この話は暑いある日に、逃げ水について調べたのがきっかけでした。そしたら決して追い付けないと書いているではありませんか。なら追い付いたらどうなんの？と思い、書き始めました。

私が小説を書く理由なんて、所詮その程度です。

それでは、少しでも暇つぶしになれたのなら、それは幸いなことです。なれなかったらごめんなさい。

次はスランプってた時に書いてた話を整理してアゲると思います。夢を喰う少女の話。

それでは失礼。またいつか。

追記。

その前に公式企画のホラー（？）でも投稿します。

追々記。

ホラーとか無理でした。夢喰い少女も出来あがないので、お茶濁しにちよいちよい投稿していきます。

## 02 - 河童の川流れ

河童の川流れ、という諺をことわざご存じだろうか。

その道に秀でた人でも失敗することもある、というような意味だったように思う。

他にも、猿も木から落ちるなどもあるが、今はどうでもいい。

「……………」

今何が問題なのかと言うと、目の前に河童が打ちあげられている、ということだ。

「……………」

どうしたらいいんだろう。一応川から上半身を出したような感じなので、目を覚ませば普通に帰っていくとは思っただけ……………。

って、違う違う。そもそも河童で存在してんの？

再度、目の前の物体に目を向ける。

「……………」

頭に皿。緑っぱい体。水掻きのついた手足。最後に甲羅。

どうみても河童です本当にありがとうございました。

「ううん……………」

「ッ!？」

やべッ! 起きる!？

とりあえずどこかに隠れようと思うも、ここは河原で、下に細か

い石が並ぶばかり。隠れられそうな木や大きな岩などは、50メートルほど先まで行かないとない。

とりあえずそこまで逃げようと思うも、逃げている姿を河童に見られたらどうなるかが怖かったし、何よりぶっちゃけ足が動かなかった。

「うう……………う？」

河童が、目を開けた。

「や、やあ……………」

挨拶を試してみた。

「どうも……………？」

挨拶を返してくれた。

って、それは置いておこうぜ。なぜそんな悠長に挨拶なんかしてるんだ俺。

「お前は人間か？」

「……………え、ああ、まあ」

今まで人間か、なんて聞かれたことが無かったので、一瞬答えに詰まってしまった。

怒るかな、なんて思っていたが、まるでそんなことはなく、むしろ笑顔で語りかけてきた。

「おお、そうかそうか！ 久方ぶりだな盟友よ」

盟友？

疑問が生じるも、あえて訊かないことにした。話がややこしくなるとヤバいし。

「お前が助けてくれたのか？」

「え、ああ、助ける前に起きてしまいましたけどね……………」

ちよっただけ嘘。どうしようか迷ってた。

「そうか、それはありがとう。なにが我らに望むものはないか？」

「望み……………」

望み、か…………。そうだな、出来れば俺の身边に関わる事じゃない方がよさそうだ。フラグ的にも俺の家に住むとかなったりしたら困るし。

「そうですね…………、ならこの川で溺れる子が無いようにして欲しいですね。出来ますか？」

「ああ、それくらいなら喜んで引き受けよう！　だが、無欲な女子おなごだなあ」

「俺は男だ」

なぜ間違えるよ。

「ははは！　すまんすまん。やはり人間の性別は分かりづらいな」

そうなのか？

「では、これで失礼するよ。この度は感謝する」

「あ、いえ。無事で何よりです」

ではな、というと、水面に波紋一つ起こすことなく、河童は川に帰って行った。

……不思議な体験、だったのだろうか。

たぶん人に言ったら、頭の可哀想な子だと思われるんだろうな、などと思いながら、俺はその場を離れた。

その後、そこがどうなるかなどということは、考える事はなかった。

後日。

とある地方の新聞に、このような記事が載った。

『奇跡！ 水難事故が突然途絶えた川』

これは、水難事故が毎年何人もの身に起こり、死亡者数も増える一方だったとある川の報道だった。夏のある時期を境に、その川周辺で水難事故がほとんど無くなったのだ。

たしかに、溺れるなどということはままあったが、そんな時でもすぐに川の流れで河岸へ運ばれ、命にかかわることは滅多になくなったそう。

そして、死亡者数はゼロ。全くの皆無。

それは奇跡の川と呼ばれ、観光客が絶えることはなく、それはそのまま近くの町の活性化につながったのだという。

——この奇跡の裏側に、とある少年が関わっていたことを知る者は、いない。

## 02 - 河童の川流れ（後書き）

どうも。

以前友人宅で構想5分、執筆時間20分で書いたのをそのまま投稿します。

低クオリティは否認ませんが、短時間で書くところな感じになる、という何かの指標になれば幸いです。

今回は河童の話。こう言った格言やら諺からストーリーを作るのは、わりと好きです。

ま、達人でもたまには失敗することもあるわけで。完璧な人間なんかいませんからね。

では。

### 03 - 偽物の雨

「あつい……………」

私は縁側で寝そべりながら呟く。

「そりゃ夏だからな」

奥から居候の少年が呟き返し、それもそうかと思いなおした。しかしそれで納得できるはずもない……………、が、それ以前に反応する力が残っていなかった。

ここは私の家だ。古き縁の日本家屋、と言えば聞こえはいいが、ただ単に古めかしい家なだけだ。

ただ、やはり私は日本人なのか、ここにいると木の香りや蘭草いぐさの香りがとても心地よいのは否めない。

私が寝そべっている縁側は、一応は影に入っており、風の通りはいい。その風に揺れる香りは、とても心地よく眠りを運んでくる。

「……………そしてそれを邪魔するのが、このあつき、というわけだな……………」

「あー？　なんか言ったか？」

「いいや、ただあついなと言っただけだ」

奥の方から少年、というか同じクラスの友人である時掛ときかけが話しかけてくるが、それに応えることすら億劫。これでは二ートのようではないか。

……………二ート？

「私は二トではない!!」

「うおッ! な、何事?」

つと、しまった。私としたことが大きな声を出してしまった。

「おーい、春日音さーん。かすがねなに大声出してんすかー?」

「いや、なんでもない」

「じゃあでけえ声出すな」

と、言いながら、時掛は私の方に歩いて来た。

何だろつと寝そべり状態から体を起こすと目の前に、ドン、と赤いものが差し出された。

「……………近くて見えない」

「じゃあ離れればいいだろうつに……………」

時掛はそう言いながら、目の前の赤い物体を遠ざける。  
するとそこにあったのは……………

「スイカではないか!」

「おー、家から持ってきた。食うだろ?」

「もちろん!」

そう言つて、かぶりつく。

口の中に広がる柔らかな甘さと、今まで冷やしていたのだろう冷たさが、火照った体に沁みわたる。

果肉の中にある黒い種は出すのが面倒だが、それを差し引いてもこの幸福感はなかなか味わえないものだろう。

「……………うまい」

「そか。良かった良かった」

そう言つと、時掛は私の隣に座り、同じようにスイカを食べ始めた。

「……………」

ふと、耳を澄ませてみた。

この辺りは木々が多いせいか、蝉の声が時雨のように降り注いでいる。その音に隠れるようにして鳥のさえずりが聞こえ、……………軽やかな風鈴の音が聞こえた。

「……………風流だな」

「ん？ 風鈴か？」

その言葉に笑顔が浮かんだ。どうやら時掛も私と同じようなことを考えていたらしい。

「な、なんだよ。違ったのか？」

「いや、正解だ。流石だな、時掛は」

そう言つと、時掛は少し居心地悪そうにして、スイカを一気に食べ終えた。

そしてどうするのか見ていると、縁側からサンダルを履いて庭に出たのだ。

「おい、あついだろつ。どうかしたのか？」

「いや、花に水やっておこつかと」

そう言えば最近雨が全然降らない。降ったとしても局地的なもの

で、しかもごく短時間しか降らない場合が多いのだ。  
だから最近では毎日の水やりが当たり前になっている。

「そうか、ありがとう」

「ま、多少強引な経緯があつたとはいえ、一応は居候だからな。これくらいの仕事はするさ」

「う……………」

くそう、時掛の奴、まだ根に持っていたのか。

というか、今、時掛がやってる水やり以外にも家事洗濯から買い物までこなしているのだから、ありがたくもこいつの行く末が恐ろしくはある。

「しかし、雨降らないな」

「……………そうだな」

そう言っただけ、時掛は空を見上げ、黙り込んでしまった。

それにつられて私も空を見上げる。

こんなに空は大きいのに、私が見る空なんてほんのごく一部だ。いつか世界中の空を見たい。それが子どものころからの夢だった。

それから視線を下げ、時掛を見た。

彼はまだ空を見上げていたが、私のような憂い顔ではなく、どこか楽しそうな横顔。それを見て少し私の心も晴れたのは、ということだろうか。

「なあ、春日音」

「ん？　なんだ？」

その声と同時に、時掛はこちらを向く。

その楽しそうな、どちらかと言えば悪ガキのような顔に、少し心拍数が上がったような気がした。

「雨が降らないなら、降らせればいいんだよな」

なんだその豊臣秀吉的思考回路は。雨乞いでもするのか？

そう思っていると、時掛は庭の隅にある水道の蛇口をひねり、ホースを上へ向けた。

次の瞬間、

「……………おお」

空高く舞い上がった水は、あたかも雨のように降り注ぎ、木々を、土を、心を潤してゆく。

それは偽物の雨。しかし、それは確かに何かを潤していく。

「どうよ。これで少しは涼しくなるだろ」

そう言って笑う時掛に、いつの間にか私もつられて笑顔になっていた。

「よし、時掛！ 私にもホースを貸せ！！」

「なッ！ お前に渡したら部屋ん中まで水浸しにするだろうが！！」

「そんな昔のこと忘れた！！」

「昨日のことだよ！？」

そう言い合いながら、ホースを求め庭を駆け巡る。

昼過ぎの太陽はまだまだ元気で、光は燦々と降り注ぎ、そして庭の隅には小さな虹が掛かっていた。

### 03 - 偽物の雨（後書き）

どうも。

これは k e i - - k u m a ・ T さんとの短編対決（？）です。  
どういうものかと言うと、同タイトルで短編を書いてみようという企画でして、私が「。。。の」と言い、k e i さんが「x x」と言います。それによって出来たタイトル「。。。の x x」というタイトルで短編を書いたわけです。

それで私が出したのが「偽物の」。k e i さんが「雨」。

……… なんだかとてもシリアス。

というわけでのんびりに変えてやりました。

k e i - - k u m a ・ T さんのところにも同タイトル「偽物の雨」で短編が投稿されておりますので、そちらも良ければご覧くださいませ。その違いを楽しんでいただけたなら重畳です。

それではこのあたりで失礼します。

ではでは。

## 04 - 上空の風車

ぼくらの空には大きな風車がある。

それはとても大きく、天を覆い、太陽を遮り、地面に向かうようにしてその羽根を地平線の遙か先まで伸ばし、その先に何かがあるのかは誰も知らない。

ぼくは空を見上げる。

それはみんなからは“風車”と呼ばれ、誰もがそれを常識だと思っている。

街の中心にはとても大きな塔があり、その遙か上空で“風車”が地面に向いて回っている。

そのせいで町にはあまり太陽の光が当たらない。

ぼくは、いつも考えていた。

あの塔の頂上には何かがあるのだろうか。

ぼくは今まで座っていた家の窓から、石畳の敷かれた道路へ飛び降りた。そして再び、雲にも隠れる“風車”を仰ぎ見る。

「……………ホント、何があるんだろうなあ」

その眩きは誰にも届かず、ただ虚空へと消えていった。

この街には決まりがある。それは、誰も塔に上ってはいけないうもの。

人は誰も疑わない。それが当たり前だったから。

……………なんのことはない。ただの“掟”なのだから。

ぼくは街を歩く。

今日も街は市場が多く開かれ、活気付いている。

しかし今日は太陽が風車の羽根に遮られる日だったのか、街全体に影が絨毯のように敷かれ、どこか陰鬱な空気を醸し出していた。しかし、それはもしかしたらぼくだけが感じているものなのかもしれない。

なぜなら、誰もがそれを普通だと、常識だと、当然だと思っているから。

「はぁ……………」

思わずため息をついた。

僕がこんな“異端”になったのは、最近のことではなく、結構昔からのことである。

なぜ誰も塔に上ろうとしないのか。あそこには塔の入り口を守る人もいないし、勝手に入れるはずなのだ。

しかし、誰もそれをしようとしらない。

それに気付いた時、ぼくは全身に鳥肌が立つような悪寒を感じた。ぼくもこれに違和感を感じなくなってしまうのだろうか。

そう考えた瞬間、ぼくはこの街では“普通”ではなくなった。

「……………風車、か」

いつの間にかぼくの足は風車の根っこ、塔の下に来ていた。

いつもはなぜかあまりこの辺りに来たくないのだが、今日はいつの間にか辿り着いてしまっていたようだ。

「やっぱり大きいな、風車は」

下からグツと背を反らさないと、塔の頂上まで見ることは出来ない。……いや、たとえそうしたとしても、頂上は薄く靄もやがかかったり、雲がかかったりと、頂上まで見通すことが出来るのはほとんどない。

そして、やはり今日も雲がかかっていて、頂上を見ることは出来なかった。

「……………この塔の頂上には何があるんだろうなあ……………」

なんて立ち止まり呟くと、近くにいたおじいさんが近寄ってきた。このおじいさんは、ぼくの家の上に住んでいる、ぼくにとっては優しいおじいさんだ。

「ほっほ。どうしたんじゃ？」

「こんにちは、おじいさん。風車の上ってどうなってるのか知ってる？」

そう訊ねた途端、おじいさんの顔は驚きに変わり、目を見開いて硬直してしまった。

「……………えっと、何かマズかった？」

「お、おお。なんでもないぞ。……………ふむ、そうか……………」

そう言つと、おじいさんは考え込んでしまった。

手持ち無沙汰になったぼくは、再び風車を見上げる。羽根より下に雨雲が出来るので、雨さえ遮ることが出来ないのに、太陽の光は遮ってしまう。

そんな風車にぼくはやはり、いい印象は持てなかった。  
そうしていると、おじいさんがぼくに向き直り、こう言った。

「のう。気になるのじゃったら上つてみたらどうじゃ？」

その言葉はこの街では異端で異常で、ありえない提案だった。

それは地動説を提唱したガリレオのように、月食の観察により地球が丸いと確信したアリストテレスのようにありえない提案だった。

「……………上つてもいいの？」

「本当は駄目じゃよもちろん。それが淀なのじゃから。……………しかしお主ならあるいは……………」

そこでおじいさんは話を区切り、頭を軽く振った。

「今はどうか分からんが、昔風車には管理者が住んでおってな、常に頂上で風車の管理を行っておったんじゃ」

「人が住んでるの!？」

それはぼくにとって、……………いや、この街の人全てにとって衝撃的な話だっただろう。

「昔の話じゃよ。今はどうなっておるか分からん。……………のう、お主。上る気はあるのか？」

おじいさんの質問に、ぼくは一も二もなく肯いた。

すでにぼくの中の欲求は極限まで膨れ上がり、今すぐにも飛び出して行きそうだった。

しかしそんなぼくを、おじいさんは優しく引き止めた。

「落ち着きなさい。誰も見張りがいないからと言って、淀は軽々しく破って良いものではない。せめて準備をして、夜になってからにするの良いじゃろう」

その言葉に多少冷静になったぼくは、とにかく準備をすることにした。

まずは食料でしょ、そして懐中電灯。

あとは何かがあるか分からないからロープとかも用意しなきゃ！考えるたびに全身に何か不思議な力が湧いてくるようだった。

「ありがとう、おじいさん！ぼくちょっと用意してくるよ！」

そう言うたぼくは、その場から走り去った。

「…………少年よ、街に新しい風を運んでくれ。この淀んだ世界をど  
うか…………」

おじいさんのそんな言葉は、誰にも届かなかった。

その夜、街に緊張が走った。

淀を破り、塔に侵入した被疑者一名。

被疑者は夜中の、月が風車の羽根によって隠れる時を待ち、風車塔内へ侵入したと思われる。

被疑者は塔を上り、空気窓から荷物の一部を落下。それを見た通りすがりが風車を見上げた時、被疑者が顔を覗かせていたことから事件が発覚した。

被疑者は<sup>よわい</sup>年齢15の少年。

身長163センチメートル。体重52キログラム。

すぐさま捜索隊を結成すべきと打診したが、評議会はこれを棄却。風車塔内は複雑に入り組んでおり、一度侵入すれば生きて帰ることが出来る保証はないというのが主たる理由だ。

これにより、被疑者確保は非常に困難であるとされる。

しかし、もし発見された時。その時は……

死刑。

## 04 - 上空の風車（後書き）

どうも。

活動報告にも書きましたが、友人と言葉を出し合って作ったタイトルで、お互い短編を書いてみようかと企画し、書いた作品です。つまり、

友「上空の？」

私「風車」

と言った感じで、できました。詳しくは活動報告でも見ていただけると良いかと。

というか、私の力量では微妙になってしまったのが残念でなりません。まあこれも私の（黒）歴史の一部ですので、こういった形に残すのもアリかな、と。

ではでは失礼します。

## 05 - 神様のアトリエ

「兄よ。私の兄よ」

「なんだ、妹」

「とりあえず死んでくださああああああああああい！  
！！」

「いやああああああああああああ！！！！」

拝啓。

本日、俺は妹に命を狙われております。

理由は置いておきまして、俺はこの妹にさんざん手を焼かされて  
おります。

俺はとある高校に通う三年生。妹も同じ学年だ。なぜかというと、  
俺は四月生まれで、妹は三月生まれ。よく頑張りました。

そしてその学校には、美術コースというのがある。

俺は昔から手先が器用で、幾多の展覧会に絵を出し、金賞を多く  
取ってきた。神様に愛された子と新聞で取り上げられたこともある。  
それから俺はエリート人生をひた走り、学校でも一目置かれる存  
在である。

その俺は、なぜか一度も彼女が出来たことがない。  
なぜだろう。

その理由が目の前にいた。

「にい！！ さっき一緒に歩いていた女は誰なんですか！？」

「クラスメイトだつてすでに数十回言いましたよね！？」

「やっぱりあの女にいを穢したんですねそうですねですか分かりまし  
たでは今すぐあの女の臓物ぶちまけて鳥の餌にでもすれば二酸化炭  
素排出を減らす役割も果たせてそのほうがあの女も本望でしょうそ

うですそくだよきつとそうですっんじゃあちよつと行ってきますねにい」

「待つて!?!? お願いだから待つて!?!?」

妹が凄いから、なんだ。

とにかく俺の周りに来る女子を片っ端から排除（比喻でなく）していくのだ。三年ともなれば学校中が知るところでもあり、俺に話しかけるような女子もいなくなった。

ある意味妹の策略にハマった気がしないでもない。

「分かりました。とりあえず女は置いておきます」

「おお! 分かってくれたか妹よ!」

「ではにい、死んでください」

「え、なにそれこわい。そしてなんで?」

「だって、にいが死ねば女が寄ってくることももうないですし。大丈夫ですよ、にいが死んでも私はずっとずっとずっとずっとそばにいますから。あはっ」

目的と手段が逆転してませんか!?

と思いながらも、俺は妹に背を向け、家の窓から飛び出した。まだ死にたくない。

「ッ!? にい、待つて下さい! じやないと殺せません!」

「そう言われて待つ馬鹿じゃないよ!」

そう突っ込みながらも俺は裸足で駆けて行くのだった。

ちなみに、誤解が解けたのはそれから三時間後だった。

俺は神様の右手を持つ人間、らしい。

たぶん利き手が右だからだろう。そう言われて嬉しいのは中学生までだ。……………いや、中学でも鬱陶しかった。

俺が賞を取るたびに新聞記者が取材に来て、プライベートを洗いざらい掲載する。それは俺の友人にまで及んだ。

そしてお偉いさんが絵を描いてくれないかと依頼に来たりする。それは依頼の形ではあるが、一種の命令だ。

……………違う。違うんだ。

俺はそんなことのために絵を描いてきたんじゃない。

「んー、どうしよう」

俺は十畳以上ある自分の部屋で、イーゼルの上に立て掛けられた白い世界を眺め、悩む。

この前は海を描いたから、今回は山を描くか？ いや、それともっと近寄って木を描くか。空を描いてもいいかもしれない。逆にゴミゴミした都会を幾何学的に描くのも面白い。筆の種類は何にしよう。水彩か油彩かも考えなきゃなー。

俺は木炭を左手で転がしながら構想を練る。なんというか、俺の描き方はどちらかと言うと物書きの考え方に近いように思う。

ぶっちゃけ自分の中で話を考えるのだ。そして、その一場面を絵画としておこす。たった一枚の絵であっても、そこには物語があるのだ。

先日の海の絵は、サンゴ礁に囲まれた恵み溢れる澄んだ海を描い

た。そこでは熱帯魚が舞い、浮かび上がる水泡は幻想的であつた。それを見たお偉いさんは、素晴らしい絵だ、と言つた。綺麗で作者の澄んだ心情を表している、と。

しかし、妹は違つた。

『なにか悲しいことでもあつたんですか？』

出来あがつた絵を見て、妹はそう言つたのだ。

「だから絵はやめらんねえな」

白紙のキャンバスを見ながらそう言つて、少し笑つた。

言葉では伝わらないことを、ダイレクトに伝えてくれる。

さてさて、それはそうとどうしよう。なに描こうか。展覧会に出すとは言つてもまだ時間はある。だけど、今日はどうせ休日だし。

「んー、風景画から離れるか。じゃあ静物画とかー歴史画とかー、あとは宗教画か？」

こうして口に出して考えるも、どうにも固まつた頭は動き出さない。

しかして、こういった時に限つてタイミングがよすぎる奴が来るんだよな。

なんてぼんやり考えていると、次の瞬間、ドアがノックされていた。

「タイミングやべえ。……………だれですかー！」

なんとなく分かりつつも、一応声をかける。

『私です。紅茶を入れましたが、飲みますか？』

「おお、ありがとよ」

そう言いつつ立ち上がり、ドアを開けた。すると、お盆の上に紅茶を二組、それとスコーンをいくつか乗せたお皿を持った妹が立っていた。

「ん、さんきゅ」

「いえ、お構いなく。私もここでお茶してもいいですか？」

「ああ、もちろん」

そう言つて、妹を招き入れる。次に絵具やらで散らかっているテーブルを簡単に片づけ、そこに置くよう言った。

実は、俺はこの自室兼アトリエには人を入れないようにしている。なんというか、ここは俺のプライベート過ぎる場所と言うか、絶対に入られたくない心の中といった感覚なのだ。

他人はもちろん、友人や、両親でさえ入れない。一度母に入れた時は、本気で話し合った。そこで怒つてもなんの解決にもならないことが分かっていたからだ。結果的に理解してくれた親は、ドアを開けるまではいいものの、部屋の中には入らない、ということに同意してくれた。十分です。

「いただきまーす」

「ええ、どうぞ」

俺はティーカップを持ちあげ、その琥珀色の液体を口に流し込む。その瞬間鼻に透き通るは店では味わえないほど上品な香り。

「これ、お前が淹れたんだよな？」

「ええ。どうでしょう、お口に合いましたか？」

「もちろん。美味しいな」

そういうと、顔を綻ばせ、妹も紅茶を飲み始めた。

この部屋には人を入れないようにしている。が、妹は別である。それがなぜかという、絵を描くきっかけが妹だったからだ。

きっかけなんか簡単だ。事故って入院した妹のために絵を描き始めた、ただそれだけ。

しかし、ただそれだけのために俺の絵は多少複雑になってしまった。

というのも、俺の絵は必ず何かを語らなくてはならなかったからだ。

俺は入院中の妹のために絵を描いていたが、ちゃんと物語が頭に入っていないと妹は首を傾げるばかりだったのだ。一番最初に妹に困った顔で『この絵って、なにも分からないよ?』と言われた時は非常にショックだった。

だから俺の絵は、物語のページなのだ。いわゆる挿絵。伝えたことは、その先にある。

なーんて、理解してくれる人が何人いるか。

「なあ」

「なんですか?」

妹はスコーンを口に頬張りながら応える。若干リスのような口には笑いを堪えつつ、意見を求めてみることにする。

「今回の絵って、どうすればいいと思う?」

曖昧すぎる問だが、一を聞いて十を知る妹なら大丈夫だろう。妹は少し考えてからこう言った。

「何か希望めいたものがないんじゃないでしょうか」  
「希望?」

「ええ。前回があれでしたから」

海の絵か。

アレは綺麗な海の中にいるが、所詮は海の中だ。人が生きることが出来ない。口から漏れ出た気泡は太陽に晒されて美しく輝くが、それに引き換え自分は光の届かない底へ沈んでいく。

その頃は記者や政治家が鬱陶しくて、そんな絵になってしまった。だからこそ美しい絵を描いたのだろう。ただの皮肉だ。

「んー、希望かー。輝いてる感じだよなあ」

「そうですね」

「例えばお前の希望は？」

「にいです」

「……………」

……………いつからこうなったんだっけ。いや、分からん。気付いたらこうなってたし。

さて、希望かー。

などと考えてながら視線を彷徨わすと、必然視界に入るのは目の前の妹。

ふむ、風景画とかもいいが、人物画もいいかもしれない。

「なあ、ちよつとお前描くわ」

「は、はあ！？ い、いやそれはちよつと恥ずかしいというか……」

……」

そんな言葉を見殺してイーゼルを用意し始める俺。無意識にだが、フヒヒ、とか言っていたらしい。

「ああ、別に固まらんでいいから。ちよつとくらいなら動いてもい

いから普通にしてて。……………では」

そう言っただけ俺は思考を切り替える。頭に浮かぶ光景を木炭でキャンバスに写し出していく。

そこから後は覚えていない。ただ、キャンバスに木炭を擦りつける音が室内に響いていたことだけ覚えている。

それから二ヶ月。

「にい、今日って展覧会の賞が発表される日ですよな？」

「んあ？ ……………あー、そうかも」

とある昼下がり、俺はソファーに寝転がり、テレビのチャンネルを弄っていた。妹は昼食に使った皿を洗っている。

「行かなくていいんですか？ にいなら金賞とか最優秀賞とかでしょう？」

「まあそうかもしれないけど、別にいいや。今回ののは完全に俺の趣味と言っただけ、周りのこと全く考えないで描いたから。それだけで俺はもう満足なのですよ」

「私を描いたんですから、最優秀でないと怒りますからね」

……………もつと本気で描いた方が良かっただろうか。

いや、あれはあれで本気だし、まあなんとかなるか。

「いつ絵が帰ってくるのかね。展覧会が終われば返してくれるとは

言ってたけど」

「またどこかの誰かが売ってくれてくるでしょうね」

「今回ばかりは売れねえよ」

ソファーから起き上がりながら苦笑する。

アレは妹を描いた人物画だ。売るわけがない。

「そ、そうですか」

「ん、そうなんよ」

そんな日常。俺が一番大事だと思える場所がここだ。

いつでも帰る場所はここなんだろう。土地ではない、その人の近くという意味での、場所。

ニコリと笑いかけると、妹は顔を赤くしながらも微笑んだ。

うん、やつぱ“ここ”だな。

そう心新たにする俺だった。

展覧会の支配人から今すぐ授賞式に来てくれと連絡が来たのは、それから十分後のことだった。最優秀賞を取った人がいないのは、どうも拙いらしい。

「面倒くさい」

「私に言われても……………」

すまん。

とりあえず、俺はこんな日常を愛している。

いつかまた絵を描く時は、何を描こうか。また妹を描くのもいいかもしれない。

そんなことを考えながら、着替えの準備を始めるのだった。

## 05 - 神様のアトリエ（後書き）

どうも。

今回は紅夏さんと短編遊びです。

どういったものかはもう説明しなくてもいいですかね？

“ 03

- 偽物の雨”でも説明しておりますので。

と、いうわけで今回はこんな感じです。

紅夏さん「神様の」

私「アトリエ」

タイトル“神様のアトリエ”。

………なんだろう。とてつもないファンタジーな気がする。

しかしあえてファンタジーにしないのが黒色猫クオリティー（低）。

40

というわけで、こんなできました。

んん、低クオリティーですね。次はもっとちゃんとしたのを書きます。すいません。

それでは。

## 06 - 猫と狐とお菓子の話（前書き）

こちらは当方で執筆中の『猫神ランドループ』の小話となります。そちらをご覧になっておられない方は、申し訳御座いませんが理解し難い内容となっております。

## 06 - 猫と狐とお菓子の話

「なあ、リナリア」

ある日、俺は城の自室にて、リナリアに問いかけた。

俺はわりとデカイソファ―に座り、リナリアはベッドの上でゴロゴロしている。そしてノアは窓辺で日向ぼっこだ。うん、平和。

それはそうと、俺の呼びかけにリナリアは持ち前の狐耳をピクリとさせながら、こちらを向いた。

「うん？ どうしたの？」

「いやさ、ハロウィンって知ってる？」

「ハロウィン……？」

……いや、よく考えたら知ってるはずないんだけどね。俺の世界のイベントだし。

「なにそれ？」

「いや、子供がトリックオアトリートって言ってだな、大人からお菓子を貰うイベント………か？」

言いながら不安になり、ノアに問いかける。ノアはその身を起し、眠たげな瞳を隠そうともせずと言った。

「まあ間違いではないじやろ。あえて言うなら仮装して、じゃけだな」

おお、そつえばするね、仮装。

「ねえ、ご主人様」  
「ん？」

なんて考えていると、リナリアがベッドから降りて、こちらに歩  
きながら問いかける。

「その……なんだっけ、とりつく？ってなんなの？」  
「あ、そうだよな。トリックオアトリートってのは、お菓子くれな  
きや悪戯するぞって意味だ」  
「ふうん、そうなんだ」

へー、と言いながら、俺の横に座る。……………モコモコ九尾が肌に  
触れて、結構和む。

「しかしユーリ。なぜ今ハロウィンなぞ言いだすんじゃない？」

ノアも窓に腰かけながら問いかける。  
いや、まあなんとなく思っただけで、そんな深い意味はないのだ  
けどね。

「まあなんつか、ハロウィンでする仮装って、だいたいが存在し  
ないものだろ？ でも俺は今それが存在しうる世界にいるんだなあ  
と、ふと思っただけ。それだけ」

ホントそれだけ。ヤマなしオチなし意味もなし。

「そうなの？」  
「ん、そうなの」

リナリアの言葉に肯く。つかリナリアだって九尾の狐だしな。

ノアなんか猫神だし。レイにいたっては龍人だ。もうなんでもござれ。

「ふうん……じゃあさ、ご主人様！」

「んあ？」

リナリアが意気込んでこちらに詰め寄ってくる。

そしてその口から吐き出された言葉は、

「とりつくおあとリーと！」

「……………」

……え、あ、は？

リナリア嬢は俺に向かって両手を出す。何だいこの手は。そしてその何かを期待しているような目は何だ。

「ふむ、なるほど」

ふとノアの声が聞こえそちらを向くと、ノアが窓から降りてこちらへ歩いてきた。何だろうと見ていると、ノアは俺の目の前で立ち止まり、あるうことかりナリア同様俺に両手を出し、こう言った。

「Trick or Treat！」

「……………」

やけに発音が良かった。

そんな2人の様子を見てみると、不意に笑いが漏れた。

「ク、ククク、あっはっはっは！ まさかこう来るとはなあ、………  
…よし、悪戯されても困るし、それじゃあ街に出てお菓子買います

かね」

「うん！ さ、行くわよ！」

「うむ、しかしわらはお菓子よりも果物が良いのう」

はいはいと言いつつ腰を上げる。

楽しそうに扉へ向かうリナリアに、それに呆れつつもどこか楽しそうについて行くノア。

うん、今日は有意義な1日になりそうだ。

「ご主人様、早く早く！」

「早く来ぬか、ユーリ」

扉付近で言い放つ2人に苦笑しつつ、俺は2人に向かって歩き出した。

## 06 - 猫と狐とお菓子の話（後書き）

どうも。

なんとなく思いつきで書きました。30分で。超短いので、まあそんなもんです。クオリティーも大したことないです。雰囲気だけ楽しんで下さい。

では！。

## 07 - 蒼天の一番星（前書き）

この物語はフィクションです。現存するいかなる小説とも関係がありません。なんか「あれ？これアレじゃね？」とか思っても気のせいです。

以上を了承された方のみお進み下さい。

「ぐあああああ！！！！」

「おい、大丈夫か！？ …… 畜生ッ！ 魔物のヤロウばかすか魔法撃ちやがって！！」

男は、隣で爆発に巻き込まれた戦友を一瞥し、生きていることが分かるとすぐに治療術師を呼ぶよう風魔法で後衛に伝えようとした。しかし、爆発の影響か周囲には砂塵が舞い、風が乱れており、男の力量では伝える事は出来ないことが分かった。

「くそつたれ！！ おい、今はとりあえず止血するから意識だけは落とすなよ！！」

「ぐあ……く、俺はもう駄目そうだ……。早く逃げろ、この皆はすでに落ちたも同然だ。早く逃げないと魔物に殺されちまう」

「ならお前も一緒に……！！」  
「馬鹿野郎！ 俺がいたら逃げられるもんも逃げられなくなるだろうが！！」

その言葉に、男は息を呑む。その行動は戦士として哀しいほどに正しい決断だった。つまりこの戦友は、自分を置いて逃げると、そう言っているのだ。

「し、しかし……」

なおも渋ろうとする男の肩を、後ろから走って来た部隊長が勢よく掴んだ。

「おい何やってる！ さっさと逃げるぞ！！ ……く、怪我人か」

「部隊長……、この馬鹿さつさと連れてって下さい。俺は足手まといになってしまいますので」

その言葉に部隊長は顔を顰め、数秒。次の瞬間には歴戦の兵士相応の鋭い眼光でこう言った。

「……………しんがり殿は任せたぞ」  
「ハッ！」

その言葉は、部隊の為に死ねという命令。しかし怪我を負った兵士としては、これほど嬉しい言葉はない。

部隊長が自分に殿を任せてくれた。たとえ自分が死んでも、名誉は残る。

そういつた考えだった。そこまで気を使ってくれた部隊長に、感謝した。

「た、隊長！ それでは……………」  
「黙れ！」

納得できなかった男の口から声が漏れるが、部隊長の叱責が飛んだ。

「ここでそれを言うな。あとでいくらでも怨嗟の声は受け止めよう。しかし、今は逃げる時だ」  
「……………ッ！」

男も気付いたのだろう。今言おうとしていたことは、戦友の決断を貶めることだと。

「……………くそ、また人が死ぬのか」

魔物がこの国を襲い始めて、早2年と少しが経とうとしていた。魔物は2年ちよつと前から活動が著しくなり、最近では各地の村々を襲つては作物を奪い、人を殺し、食糧にしていると聞く。

男は砦から下方に広がる荒野を見渡した。すでに門は破壊され、砦内に魔物が乗り込んできているだろう。いたる所から焦げ臭さや濃い鉄の臭いがする。

「なんで、なんでこうなつちまつたんだ………」

そう呟く男に、応える影があつた。

「こうなつてしまつたんですから、これからどうするかを考えなさい」

驚き男が振りかえると、そこには白い女性が立っていた。

白く長い髪の毛を纏めようとせずには振り乱し、肌は病的なまでに白い。色素という色素を全て追い出したかのような印象を受けた。しかしその中で荒野を見据える瞳は紅く、鋭さを持って魔物の群れを睨みつけている。

「時間とは不可逆なものです。過去の後悔をするより、未来の後悔を無くす努力をしなさい」

男は知らないことだが、彼女のその体は、アルビノという一種の先天性の症状である。

その女性は丈の短い、薄ピンク色のドレスを身に纏っており、戦場においてそれはありえない格好であつた。

……しかし、その姿は彼女の姿からは信じられないほどに似合つており、どこか神々しさすら感じてしまう。

「とにかく、あなた方は早くここから離れなさい。後はこちらで殲滅します。……………もちろんその怪我人も一緒に」

「お、お嬢さん、流石にそれは無理だ。すでに魔物が砦を囲んでやがる。今は裏門に人を集めて一点突破にかけるしかないからこうして探しに来たんだ。突破の際に人はさらに死ぬだろう。それでも生き残れる可能性があるならどんなことでもしなきゃならないんだ」

部隊長が突然現れた白い女性にそう言うが、そもそも女性にとってはそれが間違い。

「大丈夫です。外には我が主と仲間たちがすでに魔物の殲滅を開始しています。私は単独で砦内の魔物の掃除を任されたに過ぎません」  
「君は一体……………」

その言葉に彼女は今まで無表情だった顔を少し和らげ、こう言った。

「私はリリイ。私はただ主に付き従うだけの奴隷ですよ」

そう言うだけ言うと、リリイは手を男目掛けて真横に振る。

次の瞬間、その手から何かが発せられ、男の真後ろでキンツという軽やかな鉄の響くような音が聞こえた。

男が何事かと後ろを振り返る。

「……………？ ヒイツ！！！！」

そこには、今まさに男に飛び掛かろうとしていた狼型の魔物の姿があった。

しかしそれは動かない。なぜなら、リリイから放たれた冷却魔法

によって体内の水分が全て凍らされた後だったからだ。しかも床からは氷でできた支えがあり、魔物が倒れないようされていた。

男が、先ほど聞こえた鉄の響くような音は魔物が凍りつく音だったんだと気付くのに、そう時間はかからなかった。

「これで砦内のほとんどの魔物は殺しました。魔物の一匹や二匹、倒せますよね？」

その言葉に、隊長を含めた男3人は茫然としながらも頷くこと意思を示した。

それに満足したのかリリイは大きく1度頷いた。

「そうですか。では私も外の魔物の殲滅にかかります」

「え？」

リリイは言うや否や、砦の縁に足を掛け、そこから飛び降りた。

ここは砦で、やはりそれなりの高さを持つ。高位魔法である飛行魔法を使えば大丈夫なのかもしれないが、そんな高等魔法を覚えている魔法士など見たことがなく、男は急いで地上を見下ろした。するとそこにあったのは、氷で出来た滑り台。

リリイはあの一瞬で氷の滑り台を作り、そこから降りたのだ。

そして下方で繰り広げられるは戦闘ではなく殲滅。

リリイの腕が舞うように振られるたび、周囲の魔物が凍りつく。

そして凍りついた魔物が多くなれば、また違う魔法で氷像を破壊する。

その姿はまるで女神のように男の眼に映った。

そして軽やかに舞う銀髪は、あたかも巡り回る星のよう。

男は突き抜けるような蒼天に舞う星に、不条理な世界を食い破る様な感動を覚えた。

「……………すごい」

「ああ……………」

そう呟いた男は、ハッと気付き、部隊長に言い放った。

「は、早く逃げましょう!!」

「そうだったな。よし、こいつは俺が抱える。お前は先導して魔物を倒せ」

「了解!」

そうして男たちはその場から去って行った。

そして男たちは帰還する。

犠牲者は多数だが、それを悼みながらも酒を飲み、大声で騒ぐ。これこそが死んだ者への慰めになると彼らは考えているからだ。

そして話に上るのは、やはり砦にいた魔物を全て喰らい尽くし、助けに入った彼らの話。

様々な目撃証言があったが、情報を纏めると彼らは5人組でそれぞれが異なる魔法を使った共同戦線を張っていたらしい。

しかしその中でも1人、どうにも容姿が曖昧なのがいるらしい。その話を横から聞いていた例の男は、もしかしてその人は氷使いで銀髪、紅い目をした彼女のことではないか、と予想をつけた。

彼女の魔物の倒し方は、どうも音を出さないようにしていたように見えた。そして単独で砦に潜入した事実。男の考えでは、あれは暗殺の仕方ではないかと思ったのだ。

彼女は一体何だったのか。彼らは果たして何者だったのか。疑問

は尽きない。

しかし――

「ま、今更だがね」

今はただ、生きている事実に感謝しよう。

男は誰とでもなくそう小さく呟くと、グラスに残る酒を一気に飲み干した。

## 07 - 蒼天の一番星（後書き）

どうも、黒色猫です。

ずっと前に友人とやった『同タイトルで短編遊び』です。

私「蒼天の！」

友「一番星！」

……微妙……。

まあやるけどね。

というわけで、そんな感じで、こんな風です。

ちなみに以前友人に送りつけた文に、少々手を加えて投稿します。

まあほんの少しなんですけどね。

楽しんでいただけたなら本懐です。

では。

08 - 神様と林檎の木（前書き）

超短い。それと挿絵の実験。

追記：いろいろあつて挿絵削除。

## 08 - 神様と林檎の木

気付くと真つ白な世界に僕はいた。

果てしない白。果てのない零。その中で小さく泣き濡れる少女を見つけた。

座り込み、膝を抱え、その膝に顔を埋めて泣く少女を、見つけた。

「どうしたの？」

僕は話しかける。

「私は何処へも行けないの」

そう言って、少女は泣いた。

「なぜ？」

と僕が訊くと少女は、

「この世界には私しかない。何処へ行っても同じなら、何処へ行っても無駄、何処にも行けないわ」

と嘆いた。

だけど、と僕は思う。

「そうかな。だって現に君は僕と会ってるじゃないか」

「でも貴方は幻だわ」

少女は頑なだった。だからこそ、僕は頑なになろうと思った。

「僕が幻かどうかなんて、自分じゃ分からない。でも、だけど、君とこうして会話している僕は、僕だけのものだ。それは否定しないで欲しいかな」

僕は何故かとても冷静に答えていた。突然こんな場所に立っていることに驚きもせず、少女の言葉に耳を傾け、受け答えをしている。……もしかすると本当に僕は、少女のために、少女と話をするためだけに創られた存在なのかもしれないな。

「……ごめん」

「いいよ」

少女の謝罪を、簡単に赦す。

「でも、じゃあどうしたらいいのよ」

少女は挑むように、縋<sup>すが</sup>る様に僕を見つめた。

どうしたらいいか、だって？ そんなの、決まってるじゃないか。

「また、歩き出せばいい」

「……行きたくないわ」

「なら少し休めばいい」

「……どっちなのよ」

「どっちも。……でも、最後には歩きだして欲しいな」

そう言っ僕は笑う。

だって、そうじゃないと楽しくない。ここに居るだけじゃ、何も始まらない。

始めるために、終わらせるんだ。その思考も思想も、君を縛り付ける全てを。

「……貴方はイイヒトなのね」

「どうだろう、イイマボロシなのかもしれないね」

少し笑ったような雰囲気だったので、冗談で返す。

そして少女が顔を上げた。その泣き濡れた顔は、とても綺麗で、銀色の瞳は優しげに微笑んでいた。

「ありがとう。……お詫びと言っでは何だけど、これを貴方にあげます」

そう言っ、少女はその左手を僕に差し出した。その手にはいつの間にか、真っ赤な林檎が握られていた。

「これは……林檎？」

「そう。でも、林檎じゃない」

それはどういう意味なのだろう。でも、悪い気はせず、むしろ良い気分だった。

「うん、ありがとう」

「それはこっちの台詞だね。絶対その林檎を手放さないでね」  
「もちろんだよ」

そう言っと同時に、意識が揺らぐのが感じられた。

そっか、もう終わりか。

「ねえ」

「何？」

僕は少女に話しかけた。

「君は何処へでも行けるよ。歌でも歌いながら、ゆっくり行けばいい。また僕みたいなお節介が現れるかもしれないしね」

そう言くと、少女はクスクスと笑った。

「そうね、いい加減ここで愚図ってるのは駄目ね」

「うん。っと、そろそろ限界かな」

僕の体が下半身から消えていくのが分かる。

「じゃあ、バイバイ」

「ええ、またいつか会える時を楽しみにしておくわ」

また会うのだろうか。それはそれでとても楽しみだ。

「うん、またね」

「バイバイ」

何度も別れを惜しむ言葉を告げながら、僕の体は消えていき、まさに消え失せる寸前。

ドクン、と。手に持った林檎が、僅かに脈打つように感じられた。

自分以外誰も居なくなった空間。

その中で一人少女は立ち上がり、新しい一步を踏み出した。

数歩歩き、少女は口ずさみ始める。誰もが知っていて、誰もが知らない歌を。

## 08 - 神様と林檎の木（後書き）

どうも。

絵を描いてから、ストーリーを考えました。

ちなみにこの絵は、ニコニコ動画で活躍をされているハチさんという方のアルバム「OFFICIAL ORANGE」の中に収録されている「神様と林檎飴」という曲をモチーフに描きました。

たぶん、歌詞の内容とは全く違うストーリーになっていると思います。あまり気にせずとも良いかと。

それと、今回は挿絵とか挑戦してみました。猫神とかRe:とかでは使う気ないのですが、好き勝手出来るここなら許されるかなーと。あんま見てる人もいないことですしね。

ではー。

09 - きみの境界（前書き）

『03 - 偽物の雨』より時掛くんと春日音夜空さんを召喚。

「例えばだね、時掛<sup>ときかけ</sup>」

ある夏の日の休日、縁側でのんびりしていた俺に話しかけてきたのは、この家の所有者であり、同級生でもある春日音<sup>かすがね</sup>夜空<sup>よぞら</sup>だった。俺は訳あってここに住んでいる。というか住まわされている。ルームシェアとかそんな感じだ。

とまあそれはどうでもいいが、とにかく、春日音が俺に話しかけてきたのだ。

「なんだ？」

俺はそんざいに返す。

しかし春日音はそんなことお構いなしに俺の横に座ると、嬉しそうに話し始めた。

「例えばだね、時掛は私のことを夜空だと認識しているだろう？」

「そりゃまあ」

「なら、どこまでが私なんだろうね？」

……またわけの分からんことを。

意味が分からないという顔をする俺を見て、むしろキラキラした目になっていく春日音。右手の人差し指を一本立てながら口を開いた。

「つまり、そうだな……私がこの長髪黒髪を短髪白髪にしたら、それは私だろうか？」

「それはもったいないねえ……、いや髪形変えただけじゃんそれ」

「それならさらに、声がハスキーボイスになったら？」

「ん……、まあ心配はするだろうが、それでも春日音に違いはないだろ」

「じゃあさらに整形して顔が別人になったら？」

「あー、うん、まあそれでも春日音、かなあ」

「じゃあさらに記憶を失ったら？」

「……………」

はたして俺はその時、春日音を春日音と言えるだろうか。春日音を春日音だと認識できるだろうか。それはすでに春日音夜空ではなくなっているのではないだろうか。

「つまりはそういうことだよ。世界に君は一人しかないんだ、とはヒーローものの漫画でよくあるけどさ、はたしてそうなんだろうか、ってね」

世界に一人しかないない。しかしてそれは、体のことか精神ことか。

「てか今はどこまでが春日音か、って話だろ？ アリストテレスとはまた違う」

「確かに確かに。すまないね、話がずれた」

謝りながらもクスクスと笑いながら口元を手で隠す。

「それで、時掛。君はどこまでが私だと定義する？」

「いや、定義もなにも」

俺は一つ息をつく。

「お前がお前であるなら俺は春日音を春日音だと認識するさ」

「だからどこまでが私なんだと言ってるんだよ。何があれば私なんだと思う？」

「んー、そうだなあ……」

俺はあまり深く考えずに答えた。

「俺が、お前が春日音だという認識があれば、だな」

「は？」

「いやだから、俺が春日音だと認識してりゃあいいわけだ。例えば俺がお前を春日音だと認識しなくなったら、春日音が俺に再認識させればいいだけの話じゃね？」

「い、いや、そういう話をしてるんじゃない……」

まったく、くだらない話を延々としたがるなあ、お前は。

「春日音がなんでそんな難しい言葉で言ったのかは知らんが、春日音が春日音であり続けられたいだけの話じゃねえか。こんな常識、何をそんなに考え込む必要がある？」

本当に、なんなんだこいつは。

「……ふむ。誰でも知っている常識を難しい言葉で表現しただけ、なのかな、私の話は」

「ああ、そうだろうよ。子どもになんで自殺は駄目かと説いてる気分だったぜ」

ふむふむ、そう頷き、春日音はそれっきり黙り込んでしまった。  
しかしながら、と俺は思考を続ける。

さっき春日音が示した例。例えば春日音が事故にあって、髪がボロボロに抜け落ち脱色されて、声帯機能に支障をきたし、顔面整形

手術をしなければならなくなり、頭を強く打って俺のことを全て忘れてしまったら――。

そんな可能性、ないとは言いつれない。

その時俺は一体……。

「ま、時掛が記憶を失くしたら、その時はまた最初からやり直せばいいだけの話か」

ふと春日音がそう漏らした。

なるほど、また繰り返しさえいいだけの話か。つか俺が難しく考えたことをいとも簡単に答えを出せるんだな、お前は。

「……愚者に難しいことは賢者には簡単で、愚者に簡単なことは賢者には難しい、ってか」

「なんだ時掛。誰かの言葉か？」

「誰だっけか。忘れた」

「なら思い出せ」

「ゲーテ」

「思い出してるじゃないか!？」

漫才か。

「んで、なんでこんな話？」

「いやいや、私が私だと認識されないとすれば、お互いのことを理解しようとしていないからじゃないかなと」

「それは例えば俺が余すことなくお前の思考を十全に理解することか？」

「うん」

「そりゃあ無理だわ」

それは無理な話だ。  
ってーか、オチが見えた気がする。

「しかし私は時掛に理解してもらいたいんだ！」

「……まあ理解を試みてやるから言ってみ」

「うむ。私はアイスが食べた——」

「却下」

「——い、って途中で割り込むのは反則じゃないか？」

「どうせ買ってきてとか言うんだろ？ 却下だそんなもんメンドクサイ」

「いや、一緒に行こうと思って」

「……………」

なんか、ずるい。

「そんな話するためにここまで引つ張ったのか」

「何を言う。言葉とは人類が進化しえた中では認識を共有するための貴重な能力の一つであって——」

「置いてくぞ」

俺は演説を続ける春日音を放置し、縁側からサンダルで出た。

ちなみに財布というか、小銭入れはポケットに持っているので問題ない。

「あ、待って！ 置いていくな——」

俺は追いつがる春日音を後目に、玄関から外へ出る。

ああ、今日も暑いな。

「あつい……溶けそうだ……」

「いつそ溶けちまえ」

春日音のぼやきに即答する。

……俺の歩調がいつもより少し遅いのは御愛嬌だ。

## 09 - きみの境界（後書き）

どうも、黒色猫です。

友人と短編遊びです。

友「君の」

私「境界」

友「教会？<sup>チャーチ</sup>」

私「違う、境界だ<sup>ボーダー</sup>」

出来たタイトルが『きみの境界』。なんだかシリアス。そしてやはりシリアス（？）に。

今回はアリストテレスさんとゲーテさん、ソクラテスさんにご協力いただきました。アンタら難しいこと言いすぎだ。もっと簡単に言えば簡単に。

書いてるうちにわけわからんようになったのは内緒。

ではでは。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n6687m/>

---

Genesis

2011年9月18日01時17分発行